まだ終らない

角川小説新書

まだ終らない

昭和三十九年五月三十日　初版発行

定価弐百四拾円

著作者　陳舜臣

発行者　角川源義

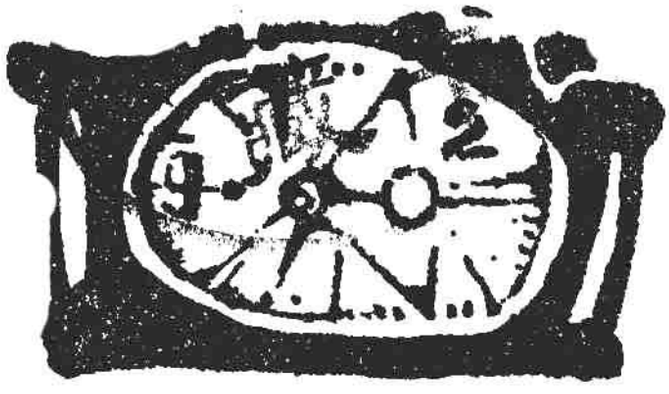
印刷者　橋本伝四郎
東京都千代田区神田神保町一ノ三三

発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話九段(261)〇一一一(代表)—五

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

Printed in Japan　同興印刷・大谷製本

陳　舜　臣



角川小説新書

この物語は、神戸の裏山を散歩中の根津常子が、ふいに蒼ざめたところからはじめるべきだろうか？

それとも、大上段に、インドネシアの政治から説きおこすべきか？　インドネシアの民族主義的傾向、華僑排斥政策……それには、インドネシアの独立がつながり、さらに太平洋戦争、いやそれ以前のオランダ植民地時代にさかのぼる必要があるかもしれない。それではキリがない。

やはりこの物語は、真っ蒼になった根津常子の胸から芽生えたと、しぼって解釈すべきであろう。だが、それにはいくらかの前奏曲を添えねばなるまい。発芽には、土壌と水が要る。その役目をつとめたのが賀承邦だから、物語の幕がきっておとされたのは、彼が日本にあらわれたときとするのが、まず妥当であろう。

1

元町一、二丁目の南がわ裏手一帯が、神戸の南京町と呼ばれる地域である。その南京町の東西に走る筋の浜がわに、一軒の漢方薬を売る店があった。

いびつな建物のガラス戸に、一枠に一字ずつ、赤ペンキで『康安薬房』と書いてある。四つの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文字はいずれも稚拙であり、筆の太さが一定していない。看板屋ではなく、ずぶの素人が書いたのは、一目でわかる。含ませすぎたペンキが、線をひいて流れおちたところも数か所あった。最後の『房』の字は最もひどく、溢れたペンキが桟のところでも停らず、さらに下の枠のガラスにまで及んでいた。

標札は二つかけてある。安物の板にぞんざいな字で、片方は『黄』、もう一つのは『共田』と読めた。黄と共田は同一人物で、この康安薬房の主人なのだ。黄宏というもと中国人が、二十年以上もまえに日本に帰化して、共田宏と名のっている。共田という姓は、黄の字を分解して創ったものである。日本籍だから、正式には共田であって、黄は棄て去った旧姓にすぎない。それにもかかわらず、二つの標札をかかげているのは、漢方薬という商売柄、中国人の顧客が多いからだった。

五十五歳の共田宏は、へしゃげた顔をもった陰気な男である。彼は帰化して以来、日本人である妻はるの内助によって、よき日本人になろうと努力してきた。日常生活からつとめて中国的なものを排除しているのだが、皮肉なことに、彼の商売はなによりも中国的であった。自分が中国人であったことを、仕事を通じてたえず思い出さねばならない。こうした矛盾が、もともとへしゃげた彼の顔を、一そうみじめに圧しつぶして行くのだろう。

十月はじめのことである。康安薬房の表のガラス戸のすきまから、郵便物の束が共田宏の仕事

台のうえに、音をたてて落ちた。

この家に、音のするほどの郵便物が舞いこむのは、きわめて稀であった。

「ふん、広告だな……」

彼は横目で、封筒に印刷された百貨店のマークを見て、呟いた。――「それにしても、今日はいっぺんに来よった」

二軒の百貨店の案内状が鉢合わせしているほか、証券会社のカタログもまじっているらしい。郵便物のほうを見やった彼の気のなさそうな目が、ふいにキラと光った。

案内状とカタログのあいだから、航空郵便の封筒の端が、三角形にのぞいていたのだ。

外国から手紙が来るなど、この家では異例のことに属する。

彼の手は素早くその封筒を抜き取った。

差出人の名は、左上の隅に印刷されていた。

泗水　源益隆公司

この七個の文字が目にとびこむと、封筒を握った共田の指は、かすかにふるえはじめた。指ばかりか、彼の胸までがあやしくときめきだしたのである。

思わずつめた息を、やっと吐きだすと、彼はうやうやしくその封筒を、目のまえにある秤(はかり)のう

えにのせた。

差出人の名を、もういちどゆっくり吟味するような目つきで読みなおす。――漢字の下には横文字が三行ならんでいるが、それは彼には読めない。

「スラバヤからだ！」

共田は心のなかで、叫んだ。

一刻も早く開封したいのをこらえて、彼はしばらく秤のうえの封筒をにらんだ。すぐに封を切るのが、何だか勿体ないような気がしたのである。

共田は漢薬商康安薬房を、三十年近くおなじ場所で経営してきた。だがそのあたりは、戦前と戦後とでは、まるきり様相がちがっている。康安薬房にしても、店の構えは戦前にくらべてかなり見劣りがする。空襲で焼けた店は、小じんまりしていたが、がっちりした骨組みの建物で、いかにも漢薬商にふさわしい威厳をそなえていたものだ。店の入口のうえにかかっていた立派な紫檀の看板は、とりわけ共田の自慢の種だった。

その看板には、『康安薬房』の四字が、大きく、深ぶかと彫られ、金箔でたっぷりと埋められていた。そして隅のほうに『源益隆敬贈』と、小さく金文字で書かれてあった。

共田が誇りとしていたのは、看板が大きいとか、極上の名木を使ってあるとか、あるいは筆蹟がみごとであるとか、そういったことではない。彼が満足そうに目をむけたのは、『源益隆敬贈』

と書かれた小さな五個の文字のうえであった。

スラバヤの源益隆公司といえば、世界にその名を知られた大財閥である。第一次世界大戦後、時流にのって莫大な産をなし、天下の富ことごとく源益隆にあつまる、と言われたものだった。

その源益隆公司の当主劉英宗こそ、共田が姨母（おば）と呼ぶひと（母の従姉にあたる）の息子である。遠縁ながら、彼の従兄なのだ。共田が三十年まえに神戸で漢薬商を開業したとき、源益隆公司からその看板が贈られた。『康安薬房』というこけおどしの大きな金文字よりも、小さな『源益隆敬贈』のほうがつつましいながらも晴れがましく思われて、それを人びとに見てもらいたいと、どんなに彼は望んだことであろう。

不幸にして、康安薬房は路地裏とはいえないまでも、薄暗いところにあったので、そんな小さな文字はなかなか人目につかなかった。だから、彼はさりげなく書かれた五つの文字に、一種のじれったさを感じたものだ。

店のまえに立ち停って、その看板を見上げる人もたまにはいたが、そんな連中は、

（ほう、店のわりにごっつい看板をかけよったなあ……）

といった表情を示すのみであった。

――いまに驚くな。

と、共田は内心で思っていたが、彼の期待に沿うような驚愕の色をあらわす人には、ついぞお

目にかからなかった。

考えてみれば、こんな裏通りで『源益隆』の文字にぶつかっても、かの世界的大財閥の名を想起して、このちっちゃな薬屋に結びつけるなど、どだい無理な話である。源益隆の名声は承知していても、

（まさかあのスラバヤの源益隆じゃあるまい。人間にも同名異人がいるのだから）

と簡単に片づけるのがオチであろう。

正真正銘の源益隆であることを、なんとか明確にしたいと思って、共田は『スラバヤ』という字を追加しようと本気になって考えたことがある。が、中国風の看板に片仮名をいれるのは滑稽（こっけい）であるし、かえってインチキめくと思い直して、断念した。漢字で『泗水』（スラバヤの漢訳字）と書き加えることも考えたが、それでは日本人にわからないだろうから、結局やめることにした。

惜しみてもあまりあることだが、この大切な看板は、空襲で焼かれてしまった。

戦争末期、共田一家は有馬の奥に疎開したが、店にあった品物はたいてい疎開先にはこんであった。看板だけははこびきれず、ついに灰になったのである。

そんな大切な看板を、なぜむざむざと焼かれたのかといえば、それは彼一人だけの宝物にすぎなかったからである。彼の妻のはるは、それを無用の長物視していた。

はるは、南洋にいる大金持の親類を、良人（おっと）ほどには有難がっていなかった。

共田一家はその夢のような財産をもつイトコから、かつて鐚一文の援助も受けたことはないのだ。

はるはよく良人にむかって言った。

「どんな金持か知らんけど、こっちが貰うたもン言うたら、あの看板一枚きりやないの。なにもそない有難がらんでもよろしおます」

貧乏人が羽振りのよい親類にすねることは、世間によくあることだ。スラバヤの劉家にたいして、はるは意外にはげしい敵意を抱いていたらしい。

だから、共田は家のなかでは源益隆や劉家のことは、あまり口にしないことにしていた。一杯機嫌でつい脱線し、禁句の源益隆の名をつづけさまに三べん口にしたばかりに、はるがヒステリーをおこしたことがある。

はるのセリフはきまっていた。――

「源益隆がどないしたンや。源益隆様々言うとるの、あんただけやがな。むこうの連中、康安薬房の名かてもう忘れてるやろ。神戸の貧乏イトコの薬屋、何ちゅう屋号やったかいな、てなもんや。ひょっとしたら、神戸にイトコがあることなんか、ころッと忘れてるかもしらんで。ほんまにあほらしい。それが、こっちゃ、寝てもさめても源益隆様々やて、はずかしいことないの！」

ざっと、こんな調子である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

したがって、源益隆という名は、共田もできるだけ言わないことにして、必要ある場合には――そんな必要はめったになかったが――『スラバヤ』と、地名でもって代用することにしていた。

こんな状態であったから、疎開の折にも看板のことを言いそびれてしまった。家具類は何回かに分けて運搬したが、看板だけは妻のヒステリーをおそれて、後まわしになったのである。一応家のなかが空(から)になってから、さりげなく、

「やあ、こいつもついでにはずして行こうか」と言うつもりだった。

ところが、アメリカの飛行機は一足さきに来襲して、その機会を彼から永久に奪った。

空襲後、わが家の焼跡にたどりついたとき、さがすまでもなく、これみよがしに横たわっている長方形の焦げた板が彼の目についた。予期していたこととはいえ、それを見たとたんに、彼は腰から下の力が、しだいに抜けて行くのを感じた。二、三歩よろめき、なにかにつかまろうとしたが、周囲には身を托すべきなにものも残っていなかった。

祈るように、彼はその場に膝をついた。焼けた看板は戻らない。それは、彼にとっては夢の象徴だった。いわれのない圧迫をうけて、心の奥へ奥へと逃げ場をもとめ、ようやく心の一ばん底にへばりついた、哀れな彼の夢である。

親戚に大金持がいる。――なんとたわいのない夢であろう。だが、共田にはかけがえのないものだった。

戦後だいぶたってから、スラバヤから一通の航空便が届いた。手紙は近況を問い合わせる簡単な文面で、この種の手紙は戦前でもときどき儀礼的に送られてきたものだ。

「なんやこの手紙は。三下り半より一行多いだけやないの」

妻のはるは、そう毒づいた。

源益隆の劉家にたいするはるの敵意は、相手が金持だからというだけではなかった。すでに日本人になった良人が、『中国人時代』のつながりに恋々としているのに、腹を据えかねたのである。

四行半の手紙にたいして、共田は便箋五枚の返事をしたためた。妻にかくれてである。だが、その熱を入れた手紙には、返事はこなかった。共田は侮辱されたような気がしたが、つぎの年にやっと年賀状が届き、いくらか心を慰めることができた。印刷された賀状の隅に、ペンで『劉英宗』と書いてあった。

さらに一年後、スラバヤから賀状は来るには来たが、肉筆サインはなかった。

三年目からは、賀状も来なくなった。

それから、七年の歳月が経過した。

さすがの共田も、自分とスラバヤ源益隆との関係が断絶したのだと思わざるをえなくなった。夢はしぼんで、もはや消えたも同然だったのである。

イトコといっても、そんなに近い関係ではない。それに、共田は劉英宗に会ったことさえないのだ。もう関係が切れてもよい時期になっていたのかもしれない。賀状だけのつながりでも、共田は自分の生きているあいだは保っていたいと願っていたが、むこうが相手にしてくれないとあれば、どうにもならない。

ときには、未練がましく臆測を逞しくする。――

「きっと源益隆の事務員の手落ちだ。世界じゅうに取引先をたくさんもっているから、住所録も電話簿ぐらいぶ厚いのにちがいない。その住所録を整理するとき、書きおとしたのだろう」

また、こんな理屈をこねてみることもあった。――

「戦後、むこうから先きに手紙が来たのだから、こんどはこちらから書いて行っても、おかしくないじゃないか」

そして、実際に筆をとって、手紙を書こうとしたことも、なんどかあった。それでも、やはり書けなかった。相手があまりにも巨大な存在であって、手紙を出すことが道化じみているように思いなされたからである。

それにしても、あの四行半にたいして出した五枚の返事は、まるで相手の首に両手をまきつけ、頬ずりせんばかりの熱がこもっていた。それを思い出すと、共田は顔がひとりでに赤くなって、できることなら、あの内容を取消したいと考えるのだった。あの熱っぽい手紙には、相手も面く

らったにちがいない。

袂(タモト)ヲトラエテ歓ヲ尽サント欲スルモ、恨ムラクハ千山万波ヲ隔テ、私願(ネガイ)ツイニ虚(ムナ)シ……。

どう考えても、おかしな文句を羅列したものだ。あまつさえ、こちらの家族を一人ずつ詳細に紹介したが、一たいなにに血迷ってそんなことを書いたのだろう。娘の盲腸手術で思わぬ経費がかかったという近況報告を、源益隆の主人は、どんな顔をして読んだのだろうか。

（あの手紙は、劉英宗に、或る種の警戒心を抱かせたのかもしれない）

そう思うと、彼は後悔したものだ。

共田はガラス戸越しに、往来を見た。

秋の太陽を受けた石畳が、ギラギラ光っている。

戦前、この町筋にはキャンバスの覆いがかぶせてあって、昼間でも暗く、それだけ人間の体臭が身近かに感じられた。いまは青天井で、なにもかもあっさり蒸発してしまう。戦後、覆いのない町になってから、共田はなんだか人間たちからつき放されたような気がして、はじめは索莫たる感じをまぬがれなかった。やがて、こちらからも人間たちをつき放す術を会得し、いまではそれが板についてきた。

そうなると、むかし覆いの下の暗い往来を歩いていた男女に、あのような濃いにおいを嗅ぎ、

自分のにおいと混ぜあわせ、一種の親密感を作り出していたことが、とんでもないまやかしに思えてきた。

やはり、互につっぱね合うのが人間同士の本来のすがたであろう。

日よけの覆いが取り払われると、なまの太陽が射しこみ、人間本然の爽快な関係、つまり互にあっさり弾きとばし合う、乾いた関係がうまれた。そういえば、あの重々しい紫檀に金文字の看板は、もはやこの町にはそぐわない。ガラスにじかに書いた赤ペンキの字こそ、むきだしのこの町にふさわしい標識と思えるのだ。

町の変貌とともに、共田宏も人間的に成長した。スラバヤの源益隆にたいしても、以前のようなじめじめした愛着をもたない。ほとんど忘れてしまったといっていいだろう。

そこへ、とつぜん、七年ぶりの来信である。すぐに封を切れなかったのも、無理からぬことなのだ。封筒のふちの赤と青の斜線を見ているうちに、あの焼けた看板が、亡霊のように眼前にちらついた。

呼吸をととのえ、心の準備をしてから、共田はやっと秤のうえの封筒を手にとった。鋏(はさみ)で封を切る。

手紙の文面はつぎのとおりであった。

宏賢弟雅鑒　久シク奉候ヲ疎カニシ歉ヲ抱クコト良ニ深シ。遙カニ起居ノ安吉、財源ノ広進ヲ祝ス。愚兄ハ碌々恒ノ如シ。タダ賤軀頑健、幸イニ介念スル勿レ。源益隆ノ業務ハ順調ト雖モ、周知スル所ノ如ク、インドネシア当局ノ外商ヲ抵制スル政策、日ニ熾烈ヲ加エ、コレヲ長ジテ以テ往カンカ、将来華人ノ商業基盤ハ恐ラク危胎ニ瀕セン。コ已ニ鑒ミテ愚兄ハ数年来資産ヲ国外ニ散ズルコトヲ図謀シ、已ニ大部分ハアメリカ香港ノ両地ニ移シ完レリ。最近業務会議ハサラニ第二次分散ヲ決定ス。人有リテ日本ハ遠東ノ工業国家ニシテ頗ル資ヲ投ズルニ足ルト提議セリ。因而近ク人ヲ派シ、調査ナラビニ日本ノ工業家ト聯系シ以テ彼ノ地ニ一蓆地ヲ得ント擬ス。理事会ハ賀承邦ヲコノ任ニ充テルコトニ決シタリ。賀君ハ外交官ノ子ニシテ日本ニ存住シ日語ナラビニ慣習ニ通暁ス。タダ恨ムラクハ日本ヲ離開シテ多年ノ故ニ、恐ラク人地ニ疎ヲ生ゼシナラン。不日賀君東渡セバ、必ズ賢弟ヲ拝訪シテ商量セン。書届レバ幸イニ一切ヲ指教セラレンコトヲ乞ウ。

賢弟スデニ年紀少ナカラズ。希クハ衣ヲ増シ餐ヲ加エンコトヲ祈ル。

愚兄　劉英宗

源益隆財閥の資本逃避が、日本をめざしているのである。いままではるかの彼方にあった夢の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com